

川と生業

江東区深川江戸資料館

現在でも区内で流れる小名木川や豎川、大横川や仙台堀などの堀割は、隅田川と中川を結び、流通の促進を図るため江戸時代の初期(慶長～寛文)に、徳川幕府によって作られました。

中期に入ると、深川には木場が移され、江戸の中心地との往来が盛んになり、商業が栄えるものになりました。やがて隅田川には、両国橋、新大橋、永代橋が架けられていきます。

このようにして古くから江東区では、河川が人々の暮らしとかわりを持ってきました。河川交通は、昭和前期まで、輸送の主力であったため河川や船に携わる仕事を持った人々が多く住んでいたのです。

陸上輸送が主流になった今日では、あまり見かけることは少なくなりましたが、一部は「伝統工芸」や「民俗芸能」を通して受け継がれています。

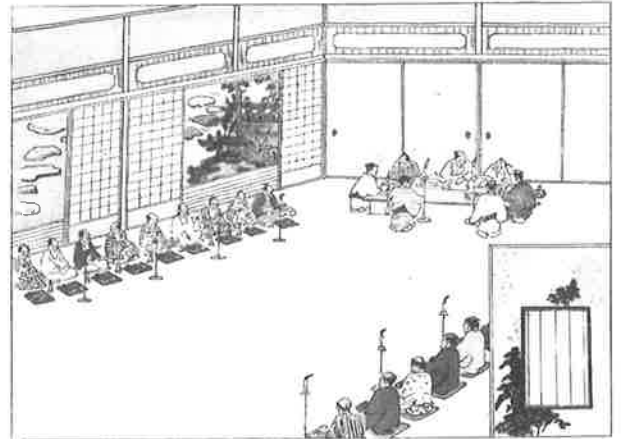
1. 元木場と豪商

江戸城をはじめ、武家屋敷や町屋を焼き尽くしたという明暦3年(1657)の大火をはじめ、江戸は何度かの大きな火災に苦しめられました。

江戸の町が作られて間もない寛永18年(1641)の大火では、市中に高積みされた材木が延焼の原因となり、幕府は防火対策を理由に材木置き場を隅田川の対岸深川に移します。これは現在の江東区佐賀・福住・永代のあたりで、最初の木場が置かれたため、この地域を元木場といいました。

元木場への移転以前から、市中の復興を支え、それによって繁栄していた材木商たちの中に、豪商として有名な二人がいます。

紀伊国屋文左衛門は、日本橋八丁堀で材木商を営み、五代将軍綱吉の側用人、柳沢吉保と親交があり、材木御用達として栄えていきました。



『木場名所図絵 入札開札場』 材木の入札は、富岡八幡宮の二軒茶屋「松本」で連夜のように行われました。(帳場には入札問屋、両側には『角屋』仲買が並んでいます。)

元禄11年(1698)の上野寛永寺(根本中堂)の造営には、その造営の資材を一手に引き受け巨万の富を得たといわれます。しかし晩年には、店を閉じて正徳年間(1711～16)のころに、ひっそりと深川の富岡八幡宮一の鳥居付近(門前仲町交差点西)に暮らしていたようです。

紀文と同様に、元禄期に活躍した豪商の代表格に奈良屋茂左衛門ならやもざえもんがいます。通称・奈良茂も、尾張家と密接な関係があり、幕府の材木御用達として一代で富を築きました。奈良茂は、先の紀文と違い幕末まで、細々ながら商売を存続したとされます。

二人に代表されるように、材木商たちは、江戸の都市政策や火事によって、繁栄を重ね、指折りの材木商に成長していったのでした。

2. 川並

川並は木場内で働く、木材を仕訳・運搬する人といいます。材木の取り扱いの業務全般に精通していました。川並の語源は江戸時代、水上で働く筏師が幕府の御用をつとめる時に、筏に並んで船手奉行の点呼を受けたことから、「川並」とよばれるように

なったともいわれます。

全国から集められた材木を
いったん木場に運び、それを筏
に組み直して神田・浅草・千住
などの河岸まで運ぶなど、川並
の仕事には材木に関する知識の
すべてが要求されました。その
ため、川並の持つ木材に関する
知識は、材木問屋以上であった
といわれます。

こうした仕事の中から、
「^{かくのり}角乗」が生まれました。タメ棹
を使ってバランスをとりながら
角材を操る角乗は、深川木場独
特の民俗芸能です。始めは、余儀だった角乗も次第
にさまざまな道具を使う高度な演技が考案されて、
一般に披露されるようになり、芸能化していきまし
た。



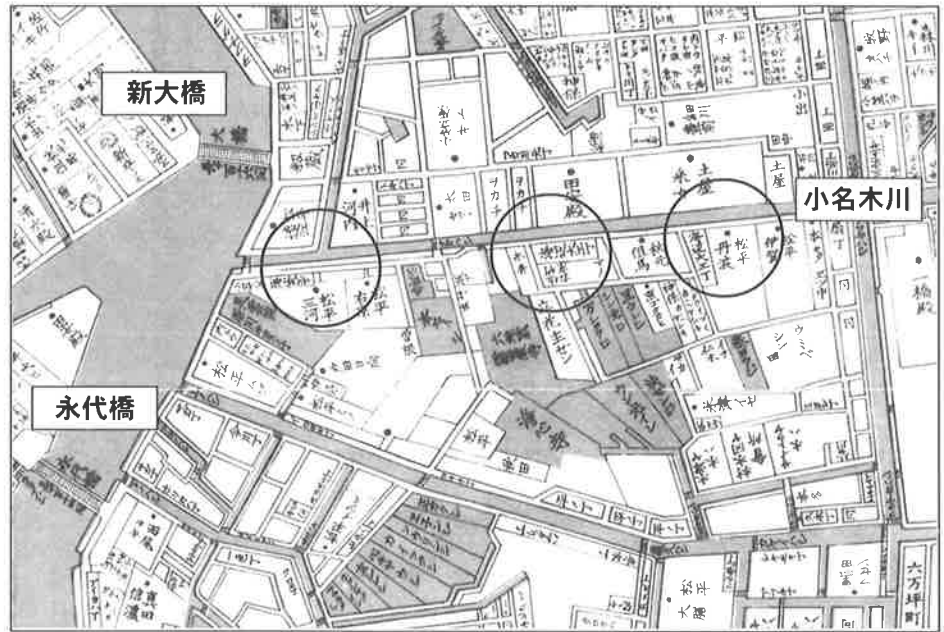
『^{かご}戻り駕籠』 花で飾った駕籠に子供を乗せて、前後を担いで角
を廻しました。「木場の角乗」は、東京都の無形民俗文化財に
指定され、毎年10月の第一土曜日に一般公開されています。

3. 海辺大工町

現在の清澄1～3丁目、白河1丁目の小名木川沿
岸は、区内でも早くから開かれた地域です。

江戸時代から、明治時代にかけては「海辺大工町」
と呼ばれました。

町名は、河川を渡航する船の製造や修理のための
船大工が多く居住したことからつきました。



天保14年『天保御江戸絵図』部分

船大工の仕事は、直接水上へ出られるようにする
必要があるため、川に面した場所に造られました。
大正の頃には、古石場川筋に17件ほどの船大工の
仕事場が軒を並べていたそうです。

4. 蔵の町

明暦の大火によって、江戸が火事に弱い都市構造
のため、幕府は防火対策を考えました。このため、従
来神田鎌倉河岸（千代田区）を中心に分布していた
幕府の倉庫群は、隅田川沿岸の浅草・本所へ移転し、
これ以降関東周辺の幕領年貢米は浅草の米蔵へ運送
されることになりました。

深川には、江戸時代からたくさんの倉庫がありま
すが、中でも隅田川沿岸の佐賀町は、町内に仙台堀・
中の堀・油堀といった堀割が流れる倉庫の多い町
で、日本橋・京橋あたりに店を構える問屋自家用の
倉庫として、あるいは、それを貸す「^{かしくら}貸蔵」として
存在していました。

河岸に着いた船から、荷をあげる力仕事に従事す
る人も多く、仕事の余技から生まれた力自慢はやが
て曲技となって、「深川の力持」として現在に受け継
がれています。